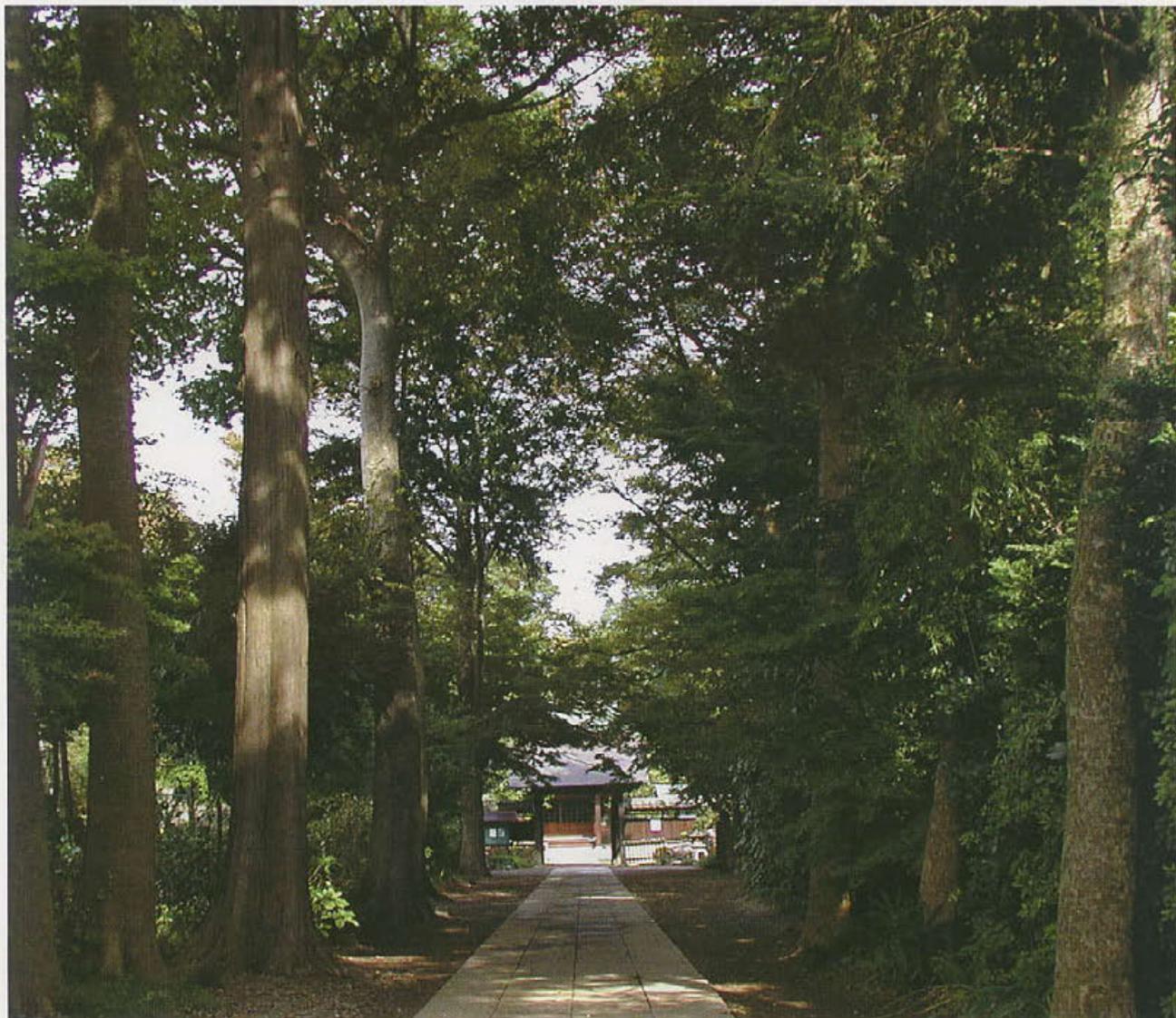




樹里安だより

ジュリアン

2000年11月
Vol. 8



..... 安行八景 (その三)

興禅院 《川口市大字安行領家401》

室町時代天文15年（1546）に創建された曹洞宗の寺。

参道にそびえ立つ五本のスダジイが見どころ。境内のまわりに繁る木々は「野鳥の森」として保護されている。

サクラ

木村 四郎

大正7年の国定教科書は「ハナ ハト マメ マス」で始まる。勿論ハナはサクラのことで、昭和7年改定の教科書も「サイタ サイタ サクラガサイタ」で始まる。

それ以前のものにも「花は桜木、人は武士……」などとあったようだ。また何千何万とある幼稚園から大学までの学校の校歌にも必ずと言っていいほど詠みこまれているのがサクラである。

敷島の やまとごころ 大和心を人とはば
朝日に匂ふ山桜花

本居宣長は、清楚なヤマザクラの一瞬の美しさを通して日本人の心を適格に表現している。まさに日本人を象徴する花、それがサクラなのである。

現在、一般にサクラと呼ばれているものは、バラ科、サクラ属、サクラ亜属に分類される植物の総称である。

むかしは、サクラと言えばヤマザクラとかサトザクラが主役であったのが、幕末ごろエドヒガンとオオシマザクラとの雑種が江戸の染井村（現・東京駒込あたり）の植木屋から売り出された。染井吉野とよばれ、生長が早く、葉の出る前に枝もたわわに花開くその華



麗さは、たちまち全国に、いや海外にまで広まった。

有名なワシントンのポトマック河畔の桜並木もこのソメイヨシノである。気象庁の発表する桜前線の標本木もこのサクラである。

さて、今回訪問する保存樹は、道合の高台にある神根小学校々庭のソメイヨシノである。グリーンセンター前のバス停からこんもりとした丘を目指して、なだらかな坂を登っていく。左手が校庭になっていて、門を入ると左の端近くにそのサクラが立っている。折しも運動会の練習らしく、音楽に合わせて低学年児童の団体技が行なわれていた。

濃い緑の葉を茂らせたサクラは、南側から見ると2mほどのところから二股になっていて、そのあたり少し痛んだところにセメントを詰めた治療のあとが見える。だが葉の茂りからみて樹勢は極めて旺盛である。子供二人でやっと手がまわるといったところか、ソメイヨシノとしてはかなりな老木である。南から西側にかけて広々とした校庭、後ろ側も他の樹木から適当な距離にあるという好条件に恵まれた居場所である。花の時期にはさぞ華やかなかおりに輝くことだろう。

皇紀2,600年（1940・昭和15）の記念碑が建っていて、その記するところによると、明治42年神根村尋常小学校が創立され、同45年高等科を併設したとある。当時このあたり人口



2千人で、昭和15年にこの足立郡神根村は川口市に合併したのである。

職員室前の古い写真や、桜の写真を拝見させてもらう。この学区は意外と広く、外郭環状線をはさんで南は新井宿から根岸、北は神戸から石神と通学するのにかなりな時間を要する子達も多いことだろう。現在児童数692名（註：平成6年当時）という。

近くに住む“筆や”さんのおばあちゃんにお話をお聞きする。かつて殿さまの領地だったこの地に学校が建ったころ、この辺には家が2軒しかなかった。その他は見渡すかぎりの田んぼで、夕方になるとキツネが泣いて、それはさびしいところだった。現グリーンセンターの山にあったお稲荷さんのあたりへ向かう「狐の嫁入」の灯がみられたという。

このあたりの田んぼは深くて、おへそまで泥につかってしまい、新しく来た嫁ごなど泣かされたという。西新井宿四つ角あたりに船着き場があって、食べ物などを運んできたそうである。

明治の末に学校が建てられたが、このサクラも多分その時に植えたものではないだろうか。それともこの辺の人は木を大事にするから、もともとあったサクラだけ残したのかもしれないが、という。典型的な日本の原風景の中にある小学校の庭に咲くサクラという構図からは、学校創立の記念に植えたと考えた方が妥当かと思われる。とすれば、このサクラはおよそ90才というところであろう。

祖父の代から筆、紙などの文具類を商ってきた“筆や”のおばあちゃんは、多々羅まささんといってこの地に70年位住んでいるという。お年は85才だそうで、まだまだ元気に前の畑で大根の種まきをしておられた。

また、下の通りでレストランを営む鳳月堂のご夫妻にも校庭のサクラにまつわる思い出などをお聞きすることができた。

今現在すでに老成の感があるが、毎年よく花をつける。入学式に間に合うか、あるいは入学式まで咲いてくれるかと、その時期になると毎年やきもきさせられるのだそうである。満開のもとでの入学式や始業式ができたら、本人はもちろん、付き添いの親御さんにとってもこんなにうれしいことはないのではなからうか。

もとの本道であった東側崖下の道を歩いてみた。崖の斜面の暗い樹木の奥に、彼岸花がひっそりと咲き、紫のくずの花びらが点々と散り、そこだけ華やかな色どりを見せている。近くに、むくろじの未だ青い実が夕べの雨に打たれて落ちたか、たくさん転がっている。

日本には、各地に桜の巨木がある。

山梨県：山高の神代桜は樹齢2,000年、

岐阜県：根尾の淡墨桜は樹齢1,500年、

福島県：三春の滝桜は樹齢800年、

いずれもエドヒガン系の巨木で、日本の三大巨桜といわれている。だいたいエドヒガン系は長寿である。千年、2千年を生き抜く。それに較べて、ソメイヨシノは寿命が極端に短いという。70～80年がせいぜいだという。花の数が多すぎるからなのだろうか。もっともソメイヨシノは誕生してまだ130年ほどの歴史しかないのだから、今後のことはわからないが条件さえよければ、相当生きられるものと思う。この神根のソメイヨシノも頑張って長寿記録を作ってもらいたいものである。

年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず。サクラは「古事記」のコノハナサクヤヒメの昔から、日本人の心に咲き続ける花なのである。あくまでも精神的なかわりを持ち続けながら日本人と共に生きてきた花なのである。

神根小のサクラも地域の人に愛され、学校のシンボルとして、100年になんなんとする歴史をじっくり見つめてきた。これからも更に100年、200年と生きて欲しいと熱い声援を送りたい。

道合の 山の間てらす 花あかり

《文・平成6年8月》



水を植物に与えることです。

これが、なかなかやさしそうで奥が深い。

種まき！苗の移植！鉢植えの植物！庭に新たに植えた植物！家を留守にするとき！

灌水は頭の痛い常について回る園芸作業です。

春夏秋冬、季節によっても乾き方は様変わりです。

植物の体内には多くの水分が含まれていて、その量は70~90パーセントもあります。植物が機嫌よく、すくくと立ってられるのも、体内に十分な水分があるからです。

朝やるか、夕方か、はたまた昼間か。いずれにしても植物が萎れない程度に水分が補給されていればO.Kです。

夏場の灌水の大変なこと。特に鉢植えの植物にとって雨以外は生きるも死ぬも100% 人の手に委ねられているわけです。昨日まで元気だった植物も一回の水不足で、回復不能になることもあります。反対に、水が多すぎて調子を崩し、枯死することもあります。何と複雑な事よ、「やはり野におけレンゲソウ」とばかりに諦めては、折角の園芸の楽しさを放棄するだけです。

ここで、灌水について考えてみましょう。



1.水の役割

水分は植物にとってかけがえのないものです。

葉に送られた水分は、炭酸同化作用によって炭水化物を作り出します。

水に溶けた養分を吸収します。

葉からの水分の蒸散によって、葉の温度上昇を防ぎます。

水が不足すると、葉焼けを起こしたり葉を落としたり、更に不足すると枯死につながります。根の呼吸作用によってできた土中の炭酸ガスを灌水によって押し出し、空中の酸素を根に供給します。

土中の水分が常に多すぎると、根は酸素不足になって、根腐れを起こします。

2.春夏秋冬の灌水について

用土の表面が白っぽく乾いてきたら灌水をするのが基本です。

SPRING 《春》

草木萌ゆる季節です。新芽が一斉に伸び始めて、水分と養分を特に必要とする時期です。やわらかい新芽は、水不足を起こすと、萎れて回復不能になります。その後の生育に大きな影響を及ぼします。鉢を乾かしすぎないようにしたいものです。

乾かしすぎないように、やりすぎないように、晴天時は1日1回が標準です。

また、梅雨時期、もしも例年より長雨で、乾く間もないような年には、水分過多でしかも日光不足とあわせて、モヤシ状態になってきます。

鉢を軒下等に移動して直接雨がかからないようにしたり、鉢の下に石などを挟んで鉢を斜めにし、雨水を鉢の表面から流れるようにします。

根傷みを防止する効果があります。

SUMMER 《夏》

梅雨明けと同時にカッと照る陽光、そして一気に上昇する気温には、植物達も慣れるまでには時間がかかります。梅雨明け一週間位は乾きと灌水に気を使ってください。

葉からの蒸散作用が激しくなります。

晴天時は朝夕1回ずつ、水をたっぷりやるのが日課になってきます。灌水した水が鉢底から流れ出るのを確認して、もう一度たっぷりやって下さい。

AUTUMN 《秋》

気温も徐々にさがってきて、乾き方もゆるやかになってきます。植物は冬に向かって成長も止まってきます。灌水は、晴天時1日1回~2日に1回くらいがめやすです。乾いたらたっぷり灌水します。

WINTER 《冬》

成長が休止してる時期です。他の季節と比べると、陽差しは弱く気温が低い分、蒸散作用も緩慢になり、よほど乾き方は遅くなります。ついつい水やりをおろそかにして、失敗するのは案外この季節なのです。1日1回は鉢をよく見て乾き具合をチェックしてください。

回数は一つの目安です。大切なあなたの植物です。日頃の観察が灌水上手になる早道です。

3.植物が吸収できる水

鉢植えにたっぷり灌水すると鉢底から水が流れ出ます。鉢内の用土にしみこんだ水と用土のすきまに残っている水（毛管水と言います。）が植物にとって利用できる水です。

毛管水が鉢内に満杯の状態から葉がしおれはじめるまでが植物に利用される水で有効水と言います。有効水を多く保持するためには有機物を混合した用土が効果的です。

4.乾かさない工夫

素焼き鉢では、鉢の側面から50%近くの水分が蒸発すると言われています。

鉢の側面に日光が直接当たらないように鉢同士を近づけて置いたり、午後は西日が当たらない場所を選んだりするだけで乾き方が違ってきます。

西側の隣家を利用したり、西側の敷地に木を植えて影を作ったり、ヨシズや寒冷紗も役に立ちます。鉢ごと土中に埋めても乾燥を防ぐことができます。

剪定は、葉からの蒸散を防ぐことになります。

用土の表面を軽く中耕（根を傷めない程度に浅く耕すこと。）することによって毛管水の蒸発を防ぎます。

雑草は早めに抜き取ることです。

（乾かさないことばかり考えていると、生き物である植物が迷惑顔をすることもあります。注意して下さい。）

水やり3年という言葉があります。これは水やりがとても難しい園芸作業であることを表したものです。植物は生き物です。一鉢一鉢が個性をもっています。一人一人が同じように灌水しているようで微妙に違うものです。同じ植物であっても一軒一軒環境が異なります。自分に合った水やりのコツを会得するのに3年位はかかるというわけです。枯らす事を恐れず、観察を忘れず、経験を積み重ねていけば、きっと身に付くものです。



おもひぐさ

(ナンバンギセル)

こんな洒落た名前の植物があります。

葉や葉緑素を持たず、他の植物の養分を吸収して生育する寄生植物ナンバンギセルの別名です。ちょっと気持ち悪いとおっしゃる向きもおありかもしれませんが、決してインベーターではありません。

遠く万葉人は、そんな植物にも親しみを込めて‘思い草’などと、情感たっぷりの名を付けて、和歌にも詠み込んでいます。



万葉集 2270番

道の辺の ^{もと}尾花が下の ^{おもひぐさ}思草
^{おも}今さらになぞ物か念はむ

《育て方》

❖ 親株を育てる

ススキ類、ウラハグサ、サトウキビ、スゲ、ミヨウガ、シヨウガなど特殊な植物に寄生します。

まず、親株を育てます。鉢植えに屋久島ススキを肥培管理しておきます。

1. 一年草植物です。

ナンバンギセルは全国に分布します。

オオナンバンギセルは本州、四国、九州に分布します。

共に8月から10月にかけて山地や草地のススキなどに寄生して開花します。

種子は晩秋に熟して（開花後、1カ月ぐらいで熟します。）、冬の乾燥期に粉末状の細かい種子を散らします。

2. 採り播き又は2月中旬～3月下旬に播きます。

親株の元を掘り起こし根ざわに粉末状の種子をこすり付けるようにして播きます。

3. 発芽は夏、開花は8月～10月



川口緑化センターの主なイベント（結果報告）



♣ 彩風展 平成12年3月31日（金）～4月2日（日）

毎年ながら、アトリウム狭しとばかりに展示される130余点の早月盆栽は、見学者を圧倒するようです。来場者は花のない状態での早月盆栽の新たな魅力に引きつけられたように、一鉢一鉢を熱心に観賞し、その風格・風雅の素晴らしさに感嘆の声を上げていました。

♣ 第50回 春の安行植木まつり 4月8日（土）～9日（日）

安行に來れば欲しい植物が揃う。植木の里「安行」の歴史ある植木まつり。新樹種の紹介コーナー、地元「赤山の枝物」をふんだんに使った華麗な生け花展、園芸相談コーナーなど天候にも恵まれ大勢の来場者でにぎわいました。



♣ 花と緑の祭典 5月3日（水）～7日（日）

訪れるお客の多いゴールデンウィークは、家庭園芸の季節でもあります。お茶席コーナー、琴演奏、山野草展は来場者でにぎわいました。また、「植木の手入れ実演講習会」は、来場者が植木を前にして、刈り込みや枝の剪定方法の指導を受けながら、実際にハサミを持って実技してみる参加型の講習会で、大勢の参加者があり好評でした。

♣ 高所作業車運転技能講習会 5月13日（土）～14日（日）

造園業の資質の向上と機械作業（高所作業）における労働安全の向上、災害防止のため、労働安全衛生法に基づき開催しました。



♣ エアープランツ講習会 5月27日（土）～28日（日）

空気中でも育つといわれる特異な植物エアープランツはパイナップル科チランジア属で、500種以上あります。土に植えなくても育つためインテリアグリーンとして楽しめます。エアープランツの紹介、管理方法、装飾方法の講習会を開催しました。

♣ 羽蝶蘭と山野草展 6月10日（土）～11日（日）

高山植物の女王コマクサに対して、ウチョウランは山野草の女王と呼ばれ、本州、四国、九州、朝鮮に分布します。草姿が小型なので場所をとらず、ベランダでも楽しめます。山野草の愛好家の中で人気の高いウチョウランと他の山野草の展示販売をしました。



♣ 第5回 緑の学会 9月17日（日）

女優であり冒険家でもある和泉雅子氏を講師に迎え「自然大好き」というテーマのもとに「①私が目指した北極点、②北海道で暮らす、③自然って素晴らしい」の講演をしていただきました。氷上の過酷な世界を冒険してきたからこそ、緑や花が心を潤し豊かにしてくれることが理解できる。緑ある生活の素晴らしさが参加者に伝わって来ました。



植物・園芸用語解説 シリーズ8

- ♣ **実生**・種子が発芽して育った幼植物。
栄養繁殖（挿し木、接木、取り木、株分けなど）の植物と区別する意味で用いられます。
- ♣ **播種**・種子を播くこと。播かぬ種は生えません。苗づくりはタネ播きから。
- ♣ **直播**・畑、庭、プランターなどに直接種子を播き、発芽苗をその場所で最後まで育てること。すじ播き、バラ播き、ツボ播き、などの方法があります。発芽苗を間引きながら健全な苗を残すように育てていきます。
- ♣ **床播き(箱播き)**・移植を前提に容器などに種子を播くこと。容器は市販の育苗箱や素焼きの平鉢などのほか発砲スチロール箱や果実の入ったプラスチック容器なども底に穴をあけて利用できます。
- ♣ **覆土**・播いた種子の上に土をかぶせること。種子の大きさによってかぶせる土の量（厚さ）を加減します。一般的には、種子の厚さ分だけ均一になるように覆土します。水分・温度・酸素が発芽の条件です。
- ♣ **子葉(双葉)**・種子が発芽したときに出る最初の葉。種子内にすでに作られています。裸子植物は2枚～多数。単子葉植物は1枚。双子葉植物は普通2枚です。
- ♣ **本葉**・子葉の次に出てくる葉。その植物が持つ本来の形をした葉。子葉と本葉では、形が異なるのが一般的です。
- ♣ **腰水**・鉢物の灌水方法の一つ。バケツなどの容器に水をためて、用土の入った鉢の底をその水に浸けて、じわじわとゆっくり吸水させる方法。細かい種子を播いたときや、乾ききった鉢物に灌水するとき、有効な方法です。腰水灌水、底面灌水とも言います。
- ♣ **間引き**・発芽苗や移植苗が混み合ってきたとき、健全な苗を育てるために不良苗を抜いたり、重なり合った苗を一本置きに抜くこと。風通しが良くなり、日光が苗全体にあたります。
- ♣ **移植**・植物を植え替えること。育苗中の植物の植え替えを言うことが多い。
- ♣ **鉢上げ(ポット上げ)**・箱播きした植物を鉢やビニールポットに移し植えること。箱播き苗をいつまでもそのままにしておくと、苗と苗の葉が重なりあうようになり、ひよろひよろ苗（モヤシ状）に育ってしまいます。
- ♣ **育苗**・発芽した苗を育苗箱に等間隔に移植またはビニールポットに植えて定植苗になるまで育てること。風通しを良くし、肥料を効かせて、ときには消毒をして、健全なガッチリした苗に育てることが大切です。
- ♣ **定植**・苗を庭または花壇や仕上げ鉢など、最後まで栽培するところに植えること。
- ♣ **中耕**・灌水を重ねるうちに次第に土の表面が膜を張ったように固まってきます。根を傷めぬように土の表面を軽く耕すように起こすこと。水がしみ込みやすくなる・空気が入りやすくなる・雑草の発芽を押さえるなどの効果があります。



「緑のステージ」が1階アトリウムに完成。



ジュリアン
樹里安

川口緑化センター・道の駅「川口・あんぎょう」

発行日：平成12年11月1日

発行：財団法人 川口緑化センター

〒334-0058 川口市安行領家844-2

TEL.048-296-4021

ホームページ：http://www.sainet.or.jp/~jurian/